

日帰り温泉の露天床で、不覚にもすべって転んだ。咄嗟に頭を打たないように回避したので、腰の打撲だけですんだのだが、あられもない姿で、☆☆を見るはめになった。

なぜ頭を回避できたかという、50年前に東京新宿の銭湯ですべって転び、ひどく頭を打った記憶の学習効果にちがいない。

昭和32年ころ、わたしたち家族は新宿の都営団地に住んでいた。その都営団地には内風呂がなかったの、毎晩、父と母に連れられ、小滝橋(大久保と高田 馬場の中間点)にある銭湯に通っていた。わたしはいつも父といっしょに男湯に、妹は母といっしょに女湯に通っていた。なぜ自分が男湯に通っていたか、実は はっきりした理由があった。それは、男湯には素人だが浪曲をうなる名人がふたりいて、それぞれが入浴中に、まさに今でいうライブがあり、たくさんのファン が湯につかって、それを楽しんでいた。

そのふたりの素人名人の日焼けした顔が、今でも想いだせる。名人ふたりは、申し合わせたのかどうか、日替わりに現れて、湯につかりながらその喉を披露していたのだ。

8歳だったわたしは、父といっしょにそのライブを堪能し、そのあと湯船から出てすべって転び、頭からかなりの出血があった。父は母から監督不行き届きを申し渡され、その後わたしは強制的に、母といっしょに女湯に通うことになった。女湯はさしておもしろくなかった。

あれから50年。転んだ瞬間に、どうやらわたしはタイム・マシンに乗車したらしい。銭湯の木桶の音、焚き木のおい、番台のおばさんの無愛想な声、脱衣場の籐かごの感触。

打撲した腰はにぶく痛むのだが、自分の顔はずっと笑っていた。これもまた、ぜいたくな午後というべきか。